

夢

暮色

近藤富枝



夢二暮色

近藤富枝



夢二暮色

一九八九年五月二〇日 第一刷発行

著者——近藤富枝
こんどうとみえ

© Tomie Kondo 1989, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三二三 郵便番号二三 電話東京三—四三—二三(大代表)
印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一五五〇円(本体一五〇五円)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
この本についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部までお願いいたします。

ISBN4-06-204305-X (文1)

目次

なみだ川	白蓮	風の音	雪舞い	旅の花	青桐	さんげふみ	恋ごろも	片だより
141	124	107	90	73	58	41	24	7

遠い山	迷路	蝶たち	未練	少年山荘	動揺	どんたく	震災	この夏
297	278	259	243	227	210	193	175	158

装幀 中島かほる
装画 竹久夢二

夢
二
暮
色

片だより

どうしたのだろうか、画室の小机の上に桜の花びらが二ひらあつらえたように散っていた。窓が開いているところを見ると、ホテルの誰かが掃除にきてくれたのだろうが、向いの女子美の校庭から、風もないのにここまで飛んでもあるまいに……と夢二はいぶかしく思った。

もう十二時に近いだろう。このところ明け方まで起きている日がつづいて、夢二は隣室のベッドから抜け出てきたままのパジャマ姿である。ここ菊富士ホテルの住人になってもう一年半になるうとしていた。へやも画室の四十号、ベッドルームの四十一号、居間の三十九号と三室も借りている。

「桜が咲きましたか」

夢二は呟いた。と、たちまち京都高台寺のほとりで隠し妻の彦乃とわび住居をしていたころのことが胸にうかんでくる。前の空地に桜の木があつて、並んで歩いている彦乃の前髪に花びらが散りかかり、夢二がとってやった。そうしながら、とるのが妙に惜しい気がしていると、彦乃がちよっとほえんだ。夢二のきもちにはひどく敏感なひとだったのだ。

その彦乃が逝った今では、彼女の入院していた順天堂に近いという理由はなくなり、ホテルを変えてもいいはずだが、夢二はそれをしなかった。この二ひらの桜は彦乃が女子美の庭から運んできたのだと思いたい。もし自分が菊富士ホテルから出たら、彼女はこんな風流なこともできなくなるじゃあないかと、夢二は思うのである。

「桜の片だよりか」

夢二は窓から外を眺め、あいかわらず女子美の校舎の窓が行儀よく並んでいるのをみとどけると、紙ヒコーキを作って一番近い窓をめがけてとばした。むろん紙ヒコーキはホテルの前の小道に落ちたが、これで彼の儀式は終わったのだ。

彦乃を想って耐えられなくなると紙ヒコーキをとばすのは、このごろの夢二の悲しいくせだった。それも昔、彦乃が学んでいた女子美の窓をめがけて……。

紙ヒコーキがとんだのをこのとき見ていた女がいた。通いモデルの永井兼代であった。兼代は田端の家からやってきて三十九号室からそれを眺めていたのだ。彼女はもう二時間も夢二の起きるのを待っている。兼代は深いため息をついた。もう何回目のため息だったろう。

「先生のとばした紙ヒコーキだ」

目がさめていながら三十九号のドアを叩かない夢二が兼代には恨めしくてならない。

「いったいいつになったら先生はわたすのことを女として眺めてくれるのすかなあ」

彼女のおもいはこの一点にかかっていた。

「いきなり兼代はわたすの娘になれなんていわれても困るんだわ。わたすにはわたすの心づうもあるのを、先生は知らないのだろうか」

夢二が食堂へ降りようとフロントを通りかかると、ホテルの娘の信子がとび出してきた。

「竹久先生、落しものが届いていますわ」

彼女が差し出したのは、夢二がとばした紙ヒコーキではないか。

「それは僕が窓から……」

「ええ、でもよく改めてごらんなさいましな」

と信子は紙ヒコーキをひっこめない。

夢二は手にさわった机の紙をあのとときよく改めずに折ったのだが、開いてみると夢二宛の雑誌社からの封筒で、なかには十円紙幣が一枚入っている……。

信子と夢二は声をあわせて笑った。

菊富士ホテルの住人は、いったいに浮世離れをした人物が多くて、一年も二年も宿泊費をためて平気な顔をしている者がいるが、十円札を屋根からとばす者はまだいなかった。

地下の食堂ではショウペンハウエルの翻訳家の増富平蔵がひとりだけ食べている。

「竹久さん、こっちへいらっしゃい」

平蔵が手招きをする。夢二はびっくりしていま降りた階段をかけあがろうかと瞬間迷った。

「いいんですか。傍へいって」

夢二は念を押した。

「ええ。いいですとも」

平蔵は病的な清潔屋で、ホテル変人メンバーのボス格であった。食堂へ出てくるのに何枚も自分用のふきんを懷中にしてきて、自身で食器をふいてからでないと食べない。夢二は食堂でいっしょになると、一番彼から遠い窓際の席を選ぶことにいつもしていた。

夢二が傍へよると、平蔵は声をひそめて、

「竹久さん、マドンナと大分親しいようだが」

と切りだす。

「マドンナ、誰のことです」

「オヤ、知らないんですか、信子さんですよ。あのひとのニックネームなんです」

「なるほど」

「信子さんとあまり親しくなさらん方がいい。彼女はレッキとしたご亭主持ちですぜ」

夢二の眉間に皺がよった。

「いまは北京に商用ででかけ、信子さんはさと帰り中なんです。亭主は軍人あがりでちょっとしたさ型ですから……」

平蔵は言うだけ言うと、オムレツにかじりついた。信子は彦乃と同年だから、もう二十五歳のはずだ。独り者だといわれても、信じられない年ごろにはちがいない。夢二は信子が結核を病んで入院を繰り返しているという話を重視しすぎていたようだ。病身だから、独身だと夢二は勝手にきめてしまっていたような気がする。

信子が人妻だと聞いて夢二の顔色が変わったのを、平蔵は見逃さなかった。

「しかしここだけの話ですが、ご亭主とはうまくいっていないらしい。仕事が失敗つづきのせいもあるが、マドンナにはそもそも悲恋の相手がいるんです」

「悲恋」

「そう、悲恋。相手はこのホテルに下宿していたロシア人でニコライ・コンラドという学者でね、ちょうどあたしがホテルにきたところに神田の方の下宿に移っていききました」

「……………」

「いい男でしたよ。背が高くてスラリとして、市村羽左衛門みたいになせで。刺身も食べるし、羽織袴で正座もする。日本語も巧くて、帝大の学生をしていて源氏物語なんぞも読もうという教養人でした。このひとが信子さんをもらいたいと、おやじさんに再三かけあったけれど、と

うとう首を振らなかった。で、神田へ移っていったんでしょね」
と、平蔵はまくし立てた。

コンラドの恋を退けたのが、やはり娘の父かと思うと、夢二は腹立たしくなる。ホテルの主人は六十歳くらいだが、二十四、五年前に一文なしで岐阜から妻子連れで上京し、いまはホテル経営のかたわら本郷区議員まで務めようというやり手である。かつて彦乃の父の笠井宗重にさんざんな目にあっている夢二は、すっかり身につまされて、コンラドと信子に同情した。思わず、
「で、信子さんの方はどうだったんでしょう」
とたずねる。

「泣く泣く、オヤジさんの言う通りになった。からだの弱いひとだから、寒いロシアへいったら死んでしまうと大分おどかされたようです」

「かわいそうに」

「菊富士ホテルの羽根田家は子福者でね、三男六女もいる。六女ですぜ。それでもコンラドに娘をやらなかった。父親の執念だね」

平蔵は三杯目のお茶漬を流しこむと、夢二の膳が運ばれてきたのをしおに立ち上がった。そして、

「ところであなたのお人形は、今日はどうしました」
と聞く。

「兼代ですか。自分のへやで、お手玉もしているでしゅう」

「これは冷い。どうしてごいっしょなさらないんです」

平蔵の目の好奇の輝きをみると、夢二は信子の話に思わずひきこまれたのまで、はかられたように気分が悪い。

平蔵は去ったが、夢二はむつかしい顔をして食べている。信子の猫のクロベエが、食堂の出窓でもちよさそうに昼寝をしていた。夢二の絵のモデルになった猫である。

へコンラド、コンラドへ

夢二は胸で何度も繰り返し、

へあっ、あの男だへ

と思ひ当った。三、四年前に盲目のロシア詩人エロシエンコの講演会で紹介された白^{はく}皙^{せき}の紳士がそれだった。放浪の男と貴公子風とのとりあわせが妙だったので覚えていた。

信子も色白の西欧風な顔立ちで、背も高く、コンラドと並んでも遜色のない美女である。娘の父というものは、娘の恋人が悪ければむろんのこと、よくても難くせをつけて許さないものなのだ。夢二には息子はいるが娘はいない。もし自分の人生で、巧くやったことをさがすなら、娘を生まざなかつたことだけでも知れないと彼は思った。

フロントを通ったが信子はいなかつた。ホテルの娘は美人揃いの上に、みな気丈者だという声を夢二も食堂で聞いたことがあるが、信子もいつも手を休めずに働いている。フロントを守っていないときは、台所に立っているか、庭を掃いているかで、細いからだが折れはしないかと夢二は案じるときもあった。

しかしこの日は違っていた。彼女は長泉寺の境内の桜の木の下で、石に腰を下ろしているのを夢二はホテルの二階の窓からみつけてしまったのだ。

夢二が好きなのは物思いする女、泣いている女、絶望している女で、笑ったり、喜んだり、怒っている女ではない。信子はいま物思いの女だった。夢二が眺めているとも知らず、地面に見入っている姿は、どこか笠井彦乃の面影がする。

いつのまにか夢二は外へ出て、信子の傍に立っていた。もともと口の重い夢二は、こんなと

き、ソツのない言葉などかける器用さはなかった。

「あら」

信子の方できづいた。

「いつからここにいらしてたのですか。ちっとも知らなかった」

「なあに、花見です。手軽な」

「いけませんわ。あのかたを置いていらしては」

「兼代なら自分のへやで、お手玉でもしているでしょう」

「……………」

「三ヵ月前に、僕は恋人をなくしました」

「存じていますわ。笠井彦乃さん」

そのあと夢二が自殺を企てたことも、信子は知っていた。

「彦乃にあなたが似ているんです」

「……………」

「でもただそれだけです。年もあなたは彦乃と同じで、しっかり者のところもいっしょです
が」

信子は少し微笑して聞いている。彼女が一年に一度花のさかりに、ホテルの隣りの長泉寺にきてたらずむのは、ニコライ・コンラドとの思い出のためだった。この場所で、はじめて愛の告白を彼から受けたからだ。

「同じような言葉をずっと昔にも、ここで聞いたように思いますわ」

「コンラドさんからですか」

信子はちょっとびくった表情であった。

夢二の方は言いながら目の眩むような嫉妬をコンラドに感じた。このひとの胸にまだゆらめいている恋の炎を消したいと思う。

「あ、もうフロントに出る時刻ですの」

信子はさりげなく立ち上った。何度も水をくぐったらしい縞銘仙だが、藤色の半襟が花明りなかでなまめき、信子は充分に美しかった。

ホテルに戻ると、兼代が夢二のへやの前に立っている。

「お入り」

彼女の顔色は紙のようだった。

「あたし、先生がヒコーキ飛ばすの、見てしまいましたの」

「そう」

「あれは信子さんとあいびきの合図すか」

「何だって」

「だって、だって、そのあとで長泉寺で逢っていたではないすか。信子さんと楽しそうに話をしていたでしょうに」

兼代は大粒の涙をポロポロこぼした。

「何もかもお前さんの勘違いさ。紙ヒコーキは飛ばしたが、意味なんかない。お前さんのおはじきといっしょさ。ところが馬鹿なことをしたんだ。ヒコーキを折った紙が十円札だったのだ」

兼代は狐につままれたような顔をしている。

「フロントに届けてくれたひとがあつてね。信子さんが渡してくれた。長泉寺で逢っていたのは、拾ってくれたひとに礼をしなきゃなんないから、その相談をね」

と夢二はとっさに下手な嘘をついた。そしてポケットからクチャクチャになった十円札入りの